

トマト独立ポット耕における密植栽培による 増収効果を明らかにしました

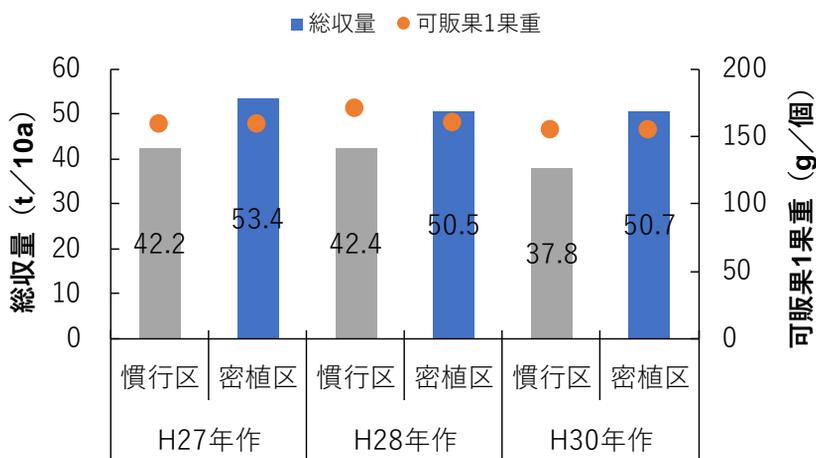
トマトの土壌病害を回避するシステムとして、岐阜県ではこれまでに少量培地の養液栽培システム「独立ポット耕」を開発し、生産者への導入が進んでいます。本システムは他の養液栽培システムに比べ導入費用が比較的安価であるものの、近年の資材費・施工費の高騰、トマト単価の低迷などが導入の障壁となっています。そこで本研究では、「独立ポット耕」の収量性をさらに向上させ、費用対効果を高めるために、新たに開発した密植用の栽培ベンチが大玉トマトの収量に及ぼす影響を明らかにしました。



栽植様式の異なるベンチの様子
(上:密植区、下:慣行区)



密植区における栽培状況



密植区と慣行区の総収量、可販果1果重の比較

(研究成果)

- ・新しく開発した密植ベンチ（密植区：株間32cm）の栽植株数は3,125株/10aとなり、慣行ベンチ（慣行区：株間40cm）の2,500株/10aと比較して25%増加します。
- ・1株あたりの可販果数および可販果1果重は、密植による影響はみられず、栽植株数の増加により単位面積あたりの収量は増加します。
- ・密植区のベンチ資材、栽培資材、給液システム関連の導入費用は慣行ベンチとおおむね同等です。